



中田 國太郎 選 投稿数16首

引間 豊作 選 投稿数25句

新盆の兄を偲へば凜とした姿ありありうたた悲しき  
 (評) 読むたびに、作者の肉親の兄を思う、深い敬慕と悲しみの心情が、ひしひしと胸に沁みる秀歌である。兄の故佐宗利信先生の大きい人間像を「凜とした」と簡潔に焦点化して表現したところに、作者の深い実力を感じた。結句の「うたた悲しき」の「うたた」は、「ますます、はなはだ」の意味。それにしても、先生が左手で、あの滋味あふれる達筆の域に達したのには、なみなみならぬ努力と苦しみの涙があつたのではないか、それは病に対する「なにくそ」という気迫ある生き方にも通じたのではないかと頻りに思うのである。

暗き世に大き光や朝よりの親王誕生のニュース速報 三沢 真下 杏子  
 米櫃の底を叩いて一合の夕餉を炊きぬ独りの晩夏 皆野 笠原三江水  
 義姉逝きて一人暮しの兄のこと案じ文書く秋の夜更けに 三沢 新井 叶子  
 牛飼いを止め初めての家族旅息子の招待草津湯の町 皆野 金子善次郎  
 幼な日の記憶たしかな冥王星リストラごとき秋の夜空に 三沢 新井 民子  
 勝馬に乗る人多し選挙戦未来平和の舵取り頼む 皆野 新井 茂  
 草刈りて蜂に刺れて腫れてゆく今日一日不幸な気分 上日野沢 四方田利男  
 ゆく夏を惜しむが如く蝉しぐれ命の限り鳴きて飛びたつ 金崎 山田 雅子  
 友去りて新盆むかえ写真見て思い出おし涙ぐむなり 三沢 横田 龍雲  
 暑き夏一億火の玉想い出す玉音放送正座して聞く 皆野 塩田 千代  
 校歌背に苦戦かさねて決勝戦女神は早実初優勝旗を 皆野 吉岡 ヨシ  
 皇族の親王誕生に天照らす太陽系も8星決る 野巻 町田 忠次

竹夫人携えて風の道に眠る 三沢 太幡 啓子  
 (評) 竹や籐を筒形に編んだもので、俗に言えはすん胴なりの、一米からも少し長いもので好みで、大きも抱き心地良い様に作らせ、夏の夜の寝苦しさを、寝ながら抱き抱えたり、手や足をまたせ掛けたりしている。と、涼しく楽なものとして、江戸時代に流行をみた竹夫人。もともとは中国よりの伝来とか謂われている。作者も暑き夜をもて余し、開け放した部屋か、大胆にも庭に延でも敷いて外寝と洒落こんだのか、羨しいかぎり、特に脆弱に流れ易い季語を、風の道と言った爽やかな言葉で引き締め、佳句に仕立てた技術に感銘。  
 鉄骨の組まるる響き翺雲  
 下日野沢 引間富美子  
 夕焼けて厨の中も染まりけり 鎌の柄に蜻蛉止まりて其の儘に 下日野 中田 久恵  
 下日野 根岸 進 皆野 新井 茂  
 鎌形と競うて遊ぶ孫二人 絵手紙のひまわりシヤンと友の顔 金沢 青木富佐子  
 金崎 設楽 武子 山路きて斜面に蕎麦の花ざかり  
 涙して去り行く球児秋の虹 下日野沢 小川 もと  
 下日野 藤田 稔 百日紅庭の眺めを一人じめ 皆野 根岸 静子  
 金崎 浅見富美子 炎天や氷屋繁昌人の列 三沢 横田 龍雲  
 大根時き顔を見に行く朝一番 三沢 沢野 恒平

俳句・短歌を募集  
 作品には、ふりがなをつけ、住所・氏名を明記して  
 企画課へお寄せください。  
 1人1句、1首に限ります。  
 8日必着

※先月号の真下杏子さんの俳句「待ちくれし」は、「持ちくれし」の誤りでした。お詫びして訂正します。